

第六章 アイデンティティの気づき

吹雪の中での決心

一九九六年春、私のニューヨーク勤務の任期が終わり、帰国して社会部に復帰する人事異動が告げられました。社会部長は私のために特別に紙面の一ページを与え、好きに編集してよいという破格の待遇まで示してくれました。

三年間、全米五十州すべてはさすがに回れませんでした、二十州ほどは取材で飛び回りました。前述したとおり大きな事件、事故、災害、政変の多い三年でした。カナダやメキシコやペルー、コロンビア、キューバ、ハイチにも取材に出かけました。国連の関係で、ボスニア・ヘルツェゴビナの内戦取材にも出かけたことはすでに書きました。つかの間の平和が訪れていたクロアチアの首都ザグレブで街を歩いていたら、地元の劇団が四年ぶりに仲間を招集し、オスカー・ワイルドの『真面目が肝心 (The Importance of Being Earnest)』を上演する稽古現場に行き当たりました。

飛び込みで話を聞かせてもらいました。主宰は三十代後半くらいの物腰の柔らかな男性で、内戦

状態の間にどう生きていたかをたどたどしい英語で懸命に教えてくれました。五つの民族、四つの言語、三つの宗教と二つの文字を持つ一つの国家だった旧ユーゴスラビアが解体して、クロアチアにも戦火が及びました。友人同士が殺し合ったのです。そして今やっとまた芝居ができるまでになった——なぜオスカー・ワイルドなのかは訊きませんでした。クロアチアはローマ・カトリックの国です。質問することは憚られました。

考えすぎだったのかもしれませんが、この『真面目が肝心』は、同性愛の隠喩が多く含まれているとして欧米ではクイア・リーディング^{*1}の格好の対象となっています。ワイルドがこれを発表する三年前にジョン・ガンブリル・ニコルソン (John Gambriel Nicholson) が出版した詩集『Love in Earnest (真面目な恋)』(一八九二)は同性愛的な情熱を詠ったもので、「Is he earnest? (彼はマジメ?)」という質問は当時の英国では同性愛者を暗示していたのです。また、この戯曲の主人公アルジャーノン¹の親友は「Earnest (アーネスト)」という名前だと信じられている。「二重生活を送る青年」で、病弱な架空の友人「Bunbury (バンベリー)」を持っています。この名前、さらに彼を訪れるとの名目で現世を逃れる習慣を指す Bunburying という造語の動詞は、Bun = 尻、Bury = 埋める、という言葉の組み合わせで出来ています。そこからこれは同性間の性行為を示していると指摘されているのです。

*1 芸術作品などの中に隠されているクイアな意味・要素を読み出そうという分析方法。

やるべきことはやった三年間ではありましたが。ただ、ニューヨークは常に「やり残したこと」が無尽蔵に用意されている街でした。正直なところ、このまままた日本に帰って、殺人や汚職や詐欺や災害や復興等々を追う社会部で自分がこの先何をしたのか、わかりませんでした。まあ、はっきり言えば帰りたくなかったんですね。おまけに、前述した〈ブルーレイ〉という、当時世界一美味しいと思われたトライベッカのフレンチ・レストランにも出遭ってしまっていたんで……。

東京から後輩の若いカメラマンが遅い正月休みを取ってうちに遊びに来ていました。九六年の二月でした。ニューヨークに到着した三年前のあの日と同じようにまたすごい大雪が降っていました。東十四丁目にあった日本人のカラオケバーに遊びに行きました。十歳以上も年若い彼に「日本に帰って何がやれるかな」などと話しながら、日本で流行っている歌を教えてもらっていました。その中にスピッツの「ロビンソン」がありました。二人で大声でそれを何度か歌い、大雪の中を三プロック離れた家まで帰る道でもまた歩きながらそれを繰り返していました。

「るーららー、うーちゅーうのお、かぜになるうー」とかなりながら、すっかり酔っ払った私は「よし、おれは宇宙の風になるぞお」と吹雪の中で叫んでいます。会社を辞めてニューヨークで執筆生活を続けようと決心した瞬間でした。四十歳でした。「どうにかなるわな」と言う「ええ、大丈夫ですよ!」と彼も保証してくれたんですが、フリーランスで何をするのか、その当てはまったくありませんでした。

あの歌詞が「風になる」ではなくて「風に乗る」だったことは後で気づきました。ちょっと違うけど、ま、そこはいいことにしました。彼は日本に帰国後、やがて新聞協会賞や東京写真記者協会賞などを次々と受賞する立派なカメラマンになりました。

もつと「ゲイのこと」を

九六年夏、退社に伴う煩雑な手続きやお世話になった人たちへの挨拶回りを終えて私は再びニューヨークに帰ってきました。さまざまな友人たちが私の独立生活を助けてくれました。エイズ取材で知り合ったセント・ルークス病院の稲田頼太郎先生は、コロンビア大学近くの二ベッドルームの安くて広いアパートを私に紹介してくれました。出版社の編集さんたちは時事問題の原稿のほかにもエッセーや評論や翻訳の仕事を割り振ってくれました。そうやって私は仕事で心配する苦勞もなく、好きなことをやることができました。

まずはゲイの友だちを作ることでした。日本でも自分でゲイバーに行ったことがなく、ニューヨークに来て忙しくてあまり行く機会もなく興味もなく、私はほとんど「ゲイのこと」に関して無知でした。ところが会社が社を辞めてニューヨークの日本人コミュニティと付き合うようになると、その中に結構な数のゲイの人たちがいることがわかりました。そして話を聞いてみると、その多くの人たちがゲイを隠さなくてはならない日本社会に嫌気がさして、あるいはイジメられて、逃げるようにニューヨークにやってきたと言う――。

そのころ、私はちょうど同じ時期に赴任していた産経新聞ニューヨーク支局長の宮田一雄さんと親しくしてもらっていました。彼は日本のエイズ報道の最初期からの第一人者で、英語では難しいエイズの医学情報や政治・法律情報をアメリカに住む日本人コミュニティのために日本語で提供しようとして、支局業務の傍ら「JAWS (Japanese AIDS Workshop)」という日本人ヴォランティア団体を立ち上げエイズの電話相談を開設していました。私もそれに協力し、その過程で前述の稲田先生とも知り合ったのです。

そうするうちにわかってきたことは、九〇年代当時の日本人コミュニティには（ビジネスで赴任しては帰国する駐ニューヨークの会社員コミュニティ内ではなく）エイズに苦しんでいる人が少なからずいたという事実でした。若い人もいましたが、中には一九六〇年代からニューヨークに来ていて、当時のジャパニーズ・レストランやヘア・サロンなどの開業の一翼を担ってきた人たちもいました。すでに亡くなった方も多くいて、ゲイを取り巻く日本の状況が彼らを結局異国の地に追いやったのだと思うようになりました。

日本にいた頃も同僚記者たちに、ニューヨークに来てからは特派員仲間にも、エイズとゲイを取り巻く状況はこれから絶対にジャーナリズムの主要テーマの一つになる、性的少数者の人権問題は誰も着手していない絶対に「旬」のテーマだと勧めてきたのですが、数少ない女性記者たちがわずかにそれに反応しただけで、男の記者たちはどの社の記者も私の話をまともに取り合いませんでした。「ゲイの記事を書いたらゲイだと思われる」とはっきり敬遠する理由を明かす記者もいました。

フリーになってからは日本のすべての新聞社、通信社、テレビ局にゲイの記者や社員がいること

を知りました。当時、アメリカ国内では「全米レズビアン&ゲイ・ジャーナリスト協会 (三三.セ)」という団体が組織されていました(第十三章で詳述)。そこに触発され、私も一度、メディア関係の日本の仲間たちをすべてつなぐネットワークを作り、いわば日本版の「NLGJA」を作って報道における差別・偏見などのバイアスを取り除く提言などを行っていかうと画策したことがあります。日本では新聞協会も性的少数者に関する報道指針を持っていなかったからです。そこでは「性的指向」が「性的嗜好」と校閲され、「ホモ」「レズ」の表記が横行していました。

ネットワークづくりは、けれど失敗でした。

日本では一人も公的にカム・アウトしているジャーナリストが(少なくとも当時の私の知る範囲では)いなかったのです。みんな、社内で自分がゲイだとわかることを(ある人は死ぬほど)怖がっていました。実際、社内でゲイだと知られて自殺した者もいたことを知っています。

フリーランスになって翌九七年、初めてボーイフレンドができました。当時のコンピュータ通信なるもので知り合ったタカヒロくんという二十三歳の若者が、大阪から語学留学にやってきて私のアパートに転がり込んだのです。よく訊けば、彼は大阪でコンピュータの専門学校に通っていたのですが、ある日教室に入ってみると、自分のデスクトップPCのスクリーンに大きく「オカマ」とマジックで書かれていたそうです。そんな日本が嫌でニューヨークに来る決心をしたのだと。

日本のゲイ事情だけでなく、ゲイであることの実際のさまざまなことを私はほとんど彼に教わりました。さらにマンハッタンの外国人向け語学学校では、若い先生たちが(中にはブロードウェイの

役者をやっている人も多く身過ぎで英語を教えたそうです。必ず 게이文化について授業を行うということも聞きました。文化圏の違うアジアや中南米、イスラム圏の生徒たちに、ニューヨークではゲイの人権がいま何より大切な問題で、それを尊重しなければここに住むことはできない……なんていう話をするのだそうでした（現在も「ゲイ」という言葉を「LGBTQ+」に替えて、それは変わっていないようです）。タカヒロくんは水を得た魚のようにとても嬉しそうでした。彼は三年後にビザの関係で職を求めてサンフランシスコに移りましたが、今ではソフトウェア開発会社UX統括部門のエライさんとして活躍しています。

タカヒロくんと付き合い、もっと「ゲイのこと」をやらなければならないと思いました。ニューヨークにいれば、半自動的に日々のニュースやテレビからだけでも膨大な素材を得ることができました。毎日毎日、「ゲイのこと」は数多くのジャーナリストから発信されていました。ドラマの制作者や、トーク番組の制作者や、作家や脚本家や学者たちから数限りない情報が横溢おちいつしていました。カミングアウトしている人が多いということは、世界がこんなにも違って描かれるということなのだとなりました。数は確実に力でした。そして手を伸ばしさえすれば、彼ら彼女らは一様に私を助けてくれました。

第三章の「エイズ禍への反撃」で紹介したラリー・クレイマーの『ノーマル・ハート』に、主人公のネッドが訴える次の一節があります。

オレが生きているこのオレたちの文化には、ブルーストもいた、ヘンリー・ジェイムズもチャイコフスキーもコール・ポーターもいた。プラトンもソクラテスもアリストテレスもアレキサンダー大王も。ミケランジェロ、レオナルド・ダ・ヴィンチ、クリストファー・マーロウ、ウォルト・ホイットマン、ハーマン・メルビル、テネシー・ウィリアムズ、バイロン、E・M・フォースター、ロルカにオーデンにフランシス・ベーコン、ジェイムズ・ボールドウィン、ハリ・スタック・サリバン、ジョン・メイナード・ケインズにダグ・ハマーシヨルドも……彼らは透明人間じゃなかったんだよ。かわいそうなブルース、怯えてばかりのブルース。昔々、きみは兵士になりたいと思っていた。知ってるかい？ 第二次世界大戦で、アメリカの勝利に最も貢献した男の一人は、ゲイを公言してた英国人だった。彼の名前はアラン・チューリング。彼はドイツの暗号を解読して、彼のおかげで連合国はナチスがどう動くのか前もって知ることができた——そうして戦争が終わり、彼は自殺した。自分がゲイであることに悩んだ果てに。どうしてこういうことを学校で教えないんだ？ 教えてたら彼は自殺しないで済んでたかもしれない。きみだって自分のことで、そんなに怯えないで済んでるはずだ。本物のプライドを手にする唯一の方法は、オレたちのこの文化がセックスだけじゃないと世間に認めさせることなんだ。すべてがここにある——歴史のすべてにわたってオレたちは存在した。でもそれを言わなきゃダメなんだ。誰がそこにいたか言わなきゃ、誰も知らないままなんだ。オレたちが何を考え、何を感じ、この世界にどんな創造的な貢献をしてきたかをはっきりぜんぶ言葉にしなきゃ

やすべて存在しなかったことになってしまふんだ。そしてそうしない限り、オレたちがこの街でこの市でこの州で一つにまとまって、透明人間じゃない、目に見えるコミュニティを作った反撃しない限り、オレたちは終わってるんだ。オレはそういう人間になりたい。充分に戦った男の一人として生きたい。オレたちの象徴はチンポだと思ってる限り、それはオレたちを文字どおり殺し続ける。オレたちみんな、自分たちの殺人犯に成り果てたいってのか？ どうしておまえもオレも、ブルース・ナイルズもネットド・ウィークスも、ゲイはそうじゃない、おまえらの思ってるゲイはオレたちのことじゃないって、新しいゲイの姿をさせなかったんだろう？ おまえだけを責めてるわけじゃない。オレも同じだけ責任がある。ブルース、オレはものすごくイヤなヤツだ。でもお願いだ、お願いだからオレを追放しないでくれ^{まじ}。

ラリー・クレイマーが列挙したこれらすべての先人たちが、私を助けてくれているように思いました。それは、私たちのアイデンティティの気づきでした。

「主語」を取り戻すということ

性的少数者のアイデンティティの確立と獲得の歴史は、私が目の当たりにしたアメリカを例にとれば、「白人」「男性」「異性愛者」と、「黒人」「女性」「ゲイ（性的少数者）」という対立軸で考えることができると思います。ある時はそこに「HIV陰性者」と「HIV陽性者」の対峙、あるいは

時を経て「シスジェンダー」と「トランスジェンダー」の対も加えながら。

それは「あらかじめそこに存在していた主権者たち」対「前者に対抗するために敢えて自らを再構築し再獲得し確立させた者たち」との対立の構図でした。

「歴史」も「世界」も、常に誰かを主語にして語られてきました。その主語は長らく「白人」の「男性」の「異性愛者」たちであり、彼らによって語られる歴史観であり世界観でした。それが前者です。

そこに「黒人」「女性」「ゲイ（性的少数者）」が台頭します。それが対立構図の後者です。彼らは自分たちを主語として歴史と世界とを語り始めました——大雑把に言うなら、五〇年代からの黒人解放運動、六〇年代からの女性解放運動、七〇年代からのゲイ解放運動を経て、歴史を語る「主語」の書き換えが行われたのです。「白人」の部分に黒人の公民権運動が言挙げをしました。「男性」の部分に女性解放運動がかぶさってきます。さらに続ければ、その次に白人の男性の「異性愛者」の部分に非異性愛者（LGBTQ+）の人権運動が襲い掛かります。

「白人」の「男性」の「異性愛者」はアメリカ社会で常に歴史の主人公の立場にいました。彼らですべての文章の中で常に「主語」の位置にいたのです。そうして彼ら「主語」が駆使する「動詞」

* 2 『ノーマル・ハート』第十三場／百四十一～百四十二頁（拙訳／大都社／二〇一九）。

の先の「目的語 (object ≡ 対象物)」の位置には、「黒人」と「女性」と「ゲイ」がいた。彼らは常に「主語」によって語られる存在であり、使われる存在であり、どうとでもされる存在でした。ところが急に「黒人」たちが語り始めるのです。ちょうどアラバマ州モンゴメリーの市営バスでローザ・パークスが拒絶の言葉を語り出したように。「黒人席に移れ」と語られる一方の「目的語 ≡ 対象物」でしかなかった「黒人」たちが、急に「主語」となって「NO!」と発語し、それはやがて「Have a Dream! (私には夢がある!)」という演説にまで拡声されたのです。続いて「女性」たちが「The Personal is Political (個人的なことは政治的なこと)」と訴え始め、「ゲイ」たちが「Enough is Enough! (もう十分なんだよ!)」と叫び出したのです。

「目的語」「対象物」からの解放、それが人権運動でした。それは同時に、それまで「主語」であった「白人」の「男性」の「異性愛者」たちの地位(主格)を揺るがします。「黒人」たちが「白人」たちを語り始めます。「女性」たちが「男性」を語り、「ゲイ」が「異性愛者」たちを自分たちの「動詞」のオブジェクト(目的語 ≡ 対象物)にします。逆を言えば、「主語(主格)」だった者たちが「目的語(目的格)」に下るのです。

実際、それらは暗にじつに性的でもありません。白人の男性異性愛者は暗に黒人男性よりも性的に劣っているのではないかと(つまりは性器が小さいのではないかと)不安であったし、女性には自分の性行為が拙いと(女子会で品定めされて)言われることに怯えていたし、ゲイには「尻の穴を狙わ



ニューヨーカーたちの度肝を抜いたカルバン・クラインの巨大ビルボード＝タイムズ・スクエア。

Photo/getty Images

れる」ことを（ほとんど妄想の域で）恐れていました。それらの強迫観念が逆に彼らを「主語（主格）」の位置に雁字搦め^{がんじがら}に固執させ、自らの権威（主語性、主格性）が白人男性異性愛者性という虚勢（相対性）でしかないことに気づかせる回路を遮断していたのです。

その象徴的で画期的な出来事が一九八二年にニューヨーク・マンハッタンの街に登場した「カルバン・クライン」の巨大ビルボードでした。

純白のブリーフだけの巨大な男性の裸体が白昼のタイムズ・スクエアに出現したのです。今でこそ公的な空間での男性ヌード広告は珍しくありませんが、この時はさすがのニューヨーカーたちも度肝を抜かれたものです。これこそが「白人・男性・異性愛者」の肉体が、高度資本主義社会史上初めて、コマージュリズムのネタ、女性やゲイたちの視線の対象（目的格）

objective) となった「事件」でした。つまり、白人の異性愛男性の肉体がここで初めて商品化⇨相対化⇨客体化されたのです。^{*3}ちなみに、この写真を撮影したのはゲイ男性であるブルース・ウェーバー (Bruce Weber)。でした。ゲイ男性の視線が男性性の位置取りを逆転させたのです。

正直に言うと、先に記した主語と目的語の話が着想したのもこのビルボードのもたらしたセクシーションを思い出したせいです。

その「下克上」がもたらした気づきが、彼ら白人・男性・異性愛者の「私たちは黒人・女性・ゲイという弱者をも庇護し尊重することで多様な社会を作っている」という「自慢」でなかったことは自明でしょう。なぜならそのテキストにおいては彼らはまだ「主語」の位置に安住しているから。「○○という可哀想な人たちがいる。私たちはそういう弱者をも庇護し尊重することで多様な社会を作っている」というのはまさに黒人奴隷を庇護した（のは彼らには自立する頭脳も機会もないからだと演説する）プランテーションの白人農場主たちの謂いであり、妻たちにクレジットカードを認めなかった（のは彼女たちを負債から守るためだと言い張った）夫たちの弁明であり、ゲイたちを病理の枠内で収めていた（のは彼らに治ってもらいたかったからだ）と釈明する）異性愛規範性の欺瞞だからです。

そうではなく、二十世紀末までにアメリカで起きた彼らの気づきは、「私たちは黒人・女性・同性愛者という「弱者」たちと入れ替え可能だったのだ」というものでした。

「マジヨリテイの解放」という逆説

「入れ替え可能」とはどういうことか？ それは自分が時に主語になり時に目的語になるという対等性のことです。それは位置付けの相対性、流動性のことであり、それがひいては「平等」ということであり、さらには主格と目的格、時にはそのどちらでもないがそれらの格を補う補語の位置にも移動可能な「自由」を獲得するということであり、すべての「格」からの「解放」だったということです。

つまり、黒人と女性とゲイたちの解放運動は、とどのつまりは白人の男性の異性愛者たちのその白人性、男性性、異性愛規範性からの「解放運動」につながるのだということなのです。もうそこに固執して虚勢を張る必要はないのだ、という。楽になろうよ、という。権力は絶対ではなく、絶対の権力は絶対に無理があるという。もっと余裕のある「白人」、もっといい「男」、もっと穏やか

* 3 同じようなことを一九九〇年のMTVアワードでマドンナが行ったVogueライヴ(youtu.be/TaXlWWR16A) 演出を元に富岡すばる(@Liv_to_Rose)氏がツイッターで指摘している。「このパフォーマンスでは、男性ダンサーの一部が、マドンナを含めた女性陣よりも肌の露出が多い」「そんな男性ダンサーたちがセクシーに踊る姿をマドンナが見ている、という構図」「脱がない男と脱ぐ女、脱がせる男と脱がされる女、そうした従来のエンターテイメントで見る構図を、このライブでは男女で逆転させている」「男性の方が性的な存在として描かれ、女性はそれを楽しむ側に立っているのだ」。

な「異性愛者」になりなよ、という運動。

これはすべての少数者解放運動に関係しています。黒人、女性、LGBTQ+に限らず、被差別部落民、在日韓国・朝鮮人、もつと敷衍して老人、病者、子ども・赤ん坊、そして障害者も、いずれも主語として自分を語り得る権利を持つ。それは特権ではありません。それは「あなた」が持っているのと同じものでしかありません。生産性がないからと言われて「家」から追い出されそうになっても、逆に「なんだてめえは!」「何様のつもりだ!」と言い返すことができる権利です(たとえ身体的な制約からそれが物理的な声にならないとしても)。すっかり評判が悪くなっている「政治的正しさ」とは、実はそうして積み上げられてきた真つ当さの論理(定理)のことははずなのです。

すべてのマイノリティたちの人権運動は、回り回って最終的にはマジョリティたちこそその解放運動なのだという逆説——マイノリティの「問題」は、実はマジョリティ側の「問題」だったという覚醒——。

ところで言わずもがなですが、「入れ替え可能」性というのはもちろん、下克上や革命があつてその位置の逆転がそのまま固定される、ということではありません。いったん入れ替われば、そこからはもう自由なのです。時には「わたし」が、時には「あなた」が、時には「彼／彼女／あるいは性分類不可能な三人称」が主語として行動する、そんな相互関係が生まれるということです。そ

れを多様性と呼ぶのです。その多様性こそが、それぞれの弱さ強さ得意不得意好き嫌いを補い合える強さであり、他者の弱虫泣き虫怖気虫を知ってやさしくなれる良さであるはずです。

——ところが事はそう簡単に運ぶものでもありませんでした。

もちろん「黒人・女性・同性愛者という『弱者』たちと入れ替え可能だったのだ」と気づいた白人・男性・異性愛者たちは少なくはありませんでした。それはきちんと社会運動にもなったし、文化として根づきもしました。

けれどそこにドナルド・トランプが登場してきました。

開き直る「トランプ」的なもの

いや、トランプは前から存在していたのですが、二〇一六年までは、彼は私の思い描く世界からはずれ駆逐される存在としてそこにいたのです。

しかしそうはならなかった。

世界の大部分において、「黒人と女性とゲイたちの解放運動は、とどのつまりは白人の男性の異性愛者たちのその白人性、男性性、異性愛規範性からの『解放運動』につながる」「もっと余裕の

ある『白人』、もっといい『男』、もっと穏やかな『異性愛者』になる」「時には『わたし』が、時には『あなた』が、時には『彼／彼女／あるいは性分類不可能な三人称』が主語として行動する、そんな相互関係が生まれる」「それを多様性と呼ぶ」——そういう「理想的で政治的に正しい社会」像への反動が始まりました。

なぜか？

「黒人」「女性」「ゲイ」という懸命に模索し獲得した（構築主義的な）「アイデンティティ」を基盤にした「政治的正しさ」の政治が、トランプ的なるものの出現に伴って、人為的なアイデンティティの発動すら必要のなかった（はずの）白人・男性・異性愛者たちの不動の既得権（の幻想）の覚醒を促したのです。そこからの反撃を誘発したのです。

彼らの彼らたる所以（アイデンティティ）はあらかじめそこに存在する初期設定としての揺るぎなさ（の幻想）でした。本質主義的過ぎて「考える必要もない」という無敵の防御ネットに纏（まと）われていました。彼らにとっては前者のアイデンティティなど、（今となっても）「うるせえんだよ」の一言で排撃できるものでしかありませんでした。そのことに今さらながらのように気づき直すのです。

なぜなら、彼らもまた本質主義的「男」という（優位だとさえ気づきもしなかった）立ち位置の中で、それでも経済的に、政治的に、傷つき苦しんでいたからです。そこには実は「白人・男性・異性愛者」という集団概念としての優位性と、個別的な幸・不幸のせいでそれとは必ずしも一致するわけではない個人としての劣位とがねじれ合っています。それは二重、三重の失意にも膨れ上がり、ますます。特権的な「主語」であったはずの（それはアメリカ開拓史においてまさに主人公だった者たちの「主

語性」です。彼らが、気づけば「黒人」「女性」「ゲイ」というマイノリティの政治に（謂れもなく）攻撃されている（と感じる）。彼らの享受するアイデンティティの政治から疎外されている（と感じる）。それはまさに現代社会における「非マイノリティ」の悲哀です。

マイノリティのためのアイデンティティの政治は、（今のところ？）マジヨリティたちのアイデンティティを脱構築するには至らず、逆にマジヨリティたちに「非マイノリティ」という、新たな別のアイデンティティで対抗させる道を与えました。マジヨリティによる「非マイノリティの政治」の前では、マイノリティを守るためのアイデンティティの政治は、その圧倒的な権力の（本質的かつ構築的な）差によって、あらかじめ敗北します。それは当初目指されたマジヨリティの脱構築ではなく、返す刀で、むしろマイノリティのアイデンティティを固定化させる方向に進んでいます。そう、彼らにとっては、「最強の85歳」だった故ルース・ベイダー・ギンズバーグの闘いすら「妻」で「母」で「女」としての闘いであり、そこから抜け出すことを許さないので。

あるトランスジェンダーの死

二〇一九年五月二十四日午後七時、ポーランドの首都ワルシャワ中心部のワジェンコフスキ橋で、二週間前に自殺したトランスジェンダーの友人ミロ・マズルキエヴィチ（Milo Mazurkiewicz）を追悼しようと「誇りと怒り」という名の人権活動家グループが集まっていました。

ミロは五月二日のフェイスブックに「もうウンザリ (I'm fed up)」と書き込んでいました。^{*4}

I'm fed up being treated like a piece of shit.

取るに足らないクソみたいな扱いを受けるのはもうウンザリ。

I'm fed up with people (psychologists, doctors, therapists) telling me I can't be who I am because I don't look like that.

みんな（精神科医や医者やセラピストたち）が私に、自分自身になろうとしてもあなたはそうは見えないから無理って言うってくるのにもうウンザリ。

Treating me as if it was all in my head and telling me I need papers proving it.

ぜんぶ考えすぎだっていうみたいに、そうじゃないならそれを証明する書類が必要だって言

われるのにもウンザリ。

Caring more about how I dress than how I feel.

あの人たちは私の感じていることよりも私の服装の方が問題だって思ってた。

Telling me that it's good that my chosen name is neutral-sounding, that it's good my body is not extremely feminine, that's it's good I haven't come out at work (yet).

私が自分で選んだ名前が男にも女にもどっちにも聞こえるのがいいと言ったり、私の体がそんなに女性的でないことがいいと言ったり、私が職場で（まだ）カム・アウトしていないことがいいと言ったり。

* 4 <https://www.facebook.com/niiomd/posts/2413727938659473>

Telling me that maybe I should stop being (trying to be) myself and wait until other doctors and therapists decide I can.

きつともう自分自身でいようなんでするべきじゃないとか、他の医者やセラピストがなんと
言うか待ちましようとか言ってくる。

I'm fed up of all of that.

そういうのぜんぶ、もうウンザリ。

Sometimes it makes me fight even more, sometimes it makes me want to end it all and stop
my life right here.

そういうことがあると時にはもっと闘ってやろうと思うけれど、時にはもうぜんぶ終わらせ
て、ここで生きるのをやめようと思ったたりもする。

Sometimes it's just makes me want to cry.

そして時々、ただ、私は泣きたくなる。

ミロは五月六日に「ごめんなさい」とだけ投稿してワジェンコフスキ橋から身を投げたのでした。追悼の友人たちが大きなレインボー・フラッグをその橋から垂らし渡したとき、一人の男が走って近づいてきてその旗を驚掴みにしました。同時に別のグループが、橋の上部の歩道部分での追悼会をも攻撃してきたそうです。その顛末は、ドローン・カメラで撮影されています。^{*5}

男は「ポーランドから出て行け！」と叫んでいました。世界中で、同じことが叫ばれています——「日本から出て行け」「アメリカから出て行け」。

そういう人たちは必ず自分のことを「普通の日本人」「普通のアメリカ人です」と自己紹介しています。「普通」とは、「マイノリティではない」ということでしょう。彼ら「非マイノリティの政治」の反撃が始まっている——そしてそれは、無数の「ミロ」たちへの個人攻撃と同時に、実際の

* 5 「Homophobic attack caught by drone in Warsaw Poland - Milo Mazurkiewicz tribute」<https://www.youtube.com/watch?v=4D0LierBhg>

政治運動としての「非マイノリティの政治」の、より高次の（集团的）政治キャンペーンに利用され始めています。

トランプという災難、トランスという受難

トランプ政権が発足した二〇一七年一月二十日当日、ホワイトハウスのウェブサイトからエイズ関連やLGBTQ+関連のページが見事に消えてなくなっているのを見つけた時の啞然さを今も憶えています。キリスト教保守派の福音派の支持を受け、宗教原理主義者の副大統領マイク・ペンスを据えた新政権のことですから予想はついていました。しかしまさか就任から間髪入れずに消してしまうとは、そのあからさまさに、来る四年間の逆風のえげつなさを覚悟したものです。

とは言え、さすがに「ストーンウォールの反乱」以来半世紀を経たアメリカ社会で、ゲイやレズビアンたちの獲得してきた人権は易々と否定できるものではありませんでした。そこでトランプ政権が狙ったのがまだ理解と共感とが成熟しきっていないなかった「トランスジェンダー」という存在への集中攻撃でした。

おさらいします。

トランプ前のオバマ政権は教育や社会保障といった分野で「性別」の定義を個人の選択とする考えを打ち出し、トランスジェンダーの生徒に自らが選んだ「性」のトイレの利用を認めました。

米軍へのトランスジェンダーの入隊も二〇一六年に受け入れることを決めたのです。

ところがトランプ政権は発足一カ月後の二月二十二日、生徒が自分の決める性別に応じてトイレを使用できるとしたオバマのトランスジェンダー生徒保護ガイドラインを撤回。さらに七月には「米軍は圧倒的な勝利のために集中しなければならず、トランスジェンダーの受け入れに伴う医学的コストや混乱の負担は受け入れられない」などとして米軍へのトランスジェンダー新規入隊の停止措置を執ったのです。当時すでに米軍全体の1%に当たる九千人のトランスジェンダーが軍務に就いているとされていたのに。

これはさすがに連邦裁判所によって阻止され、入隊手続きは再開されましたが、トランプ政権は諦めません。発足二年目、中間選挙を控えて保守派の票固めをしたいトランプはさらなる攻撃に出ます。

選挙直前の十八年十月、トランプ政権は「性別」の定義を「男性か女性かのいずれか一方」であり「生まれた時または生まれる前に確認された不変の生物学的特徴に基づく」と規定し、また「出生証明書の原本に記載された性別は、信頼できる遺伝的証拠による反証がない限り変更できない」とする方向で統一することを検討している、と《ニューヨーク・タイムズ》が報じました。それまでの小手先のトランス排除措置ではなく、性別に違和感を持つトランスジェンダーの概念そのものから否定しようとしたのです。全米で推定百四十万人と言われたトランスジェンダーの人々の存在を「無」にする動きでした。

こうした一連の反トランスの気運は、社会全体の空気を変質させました。アメリカの大統領が率

先してトランスフォビアを煽^{あほ}っているのです。それはLGBTQ+コミュニティ全体へのフォビアを明示化し加速させました。

二〇二〇年十月に出た《サイエンス・アドヴァンセズ (Science Advances)》誌のアンドルー・フローレス (Andrew R. Flores / アメリカン大学准教授) らの論文⁶によれば、セクシュアルおよびジェンダー・マイノリティ (SGMs) の千人に七十一・一人が暴力被害に遭^あっていて、これはマイノリティ以外の同十九・二人という数字に比べて四倍近く高いということがわかったのです。これらは二〇一六年以降に連邦司法統計局が収集した国内犯罪調査のデータを基に計算されています。しかもSGMsはレイプや性的暴行、強盗などのより凶悪・暴力的な犯罪の犠牲になることが多かった。

それ以前は性自認や性指向の質問がなかったので比較する数字がないのですが、一方、独自にデータを収集している人権団体「ヒューマン・ライツ・キャンペーン (Human Rights Campaign) (HRC)」によると、米国でのトランスジェンダーに対する暴力事犯は増加傾向にあり、殺害された数もわかつていて毎年三十人近くを数えるようになっていきます。しかもその大半は非白人のトランス女性。もっとも、そもそも警察は多く犯罪報告に際してトランスジェンダーが犠牲者であった旨を報告する規則はなく、しかも報告された情報も一元化するシステムがなく、さらには警察官が被害者の性別を誤って判断することも少なくないため、実際の暴力被害は報告件数よりもはるかに多いはずだとされています。

一方、トランプ政権下で再び台頭したのが「信条・信教の自由」問題でした。結婚の平等 (同性婚合法化) が達成されたオバマ政権下でリベラルな気運が高まると当然その反動も目立ち始めます。

有名な事案が二〇一二年のコロラド州のケーキ店へマスターピース・ケーキショップでのゲイ・カップル用ウエディングケーキ注文拒否事件でした。

店主は自身のキリスト教への信仰を理由にゲイ・カップルへのケーキ作りを断ったのです。これは下級審では「差別」と認定されましたが、トランプ政権下の二〇一八年の連邦最高裁は、この事案を最初に「差別」と認定した「公民権委員会」の審理過程で、委員が信教の自由への反感を示していた（偏見を持っていた）のを看過したという審理の公正さに問題があったとして、そもそも「差別」認定を破棄しました。そして最高裁自身は、「ゲイの人々の尊厳は守られるべき」と明言しながらもこれが差別か否かという判断には踏み込まなかったのです。

この結果、同性婚をめぐるっては宗教的立場から全米各地で花やヴィデオ撮影などのサービスを提供し（たく）ないという業者が顕在化し、新たな裁判で争われることになりました。

衝突する二つのマイノリティ

そこでバイデン政権の対応です。二〇二二年一月二十日、新大統領は前大統領の路線を払拭しようとして就任初日の一日で十七本もの大統領令（行政命令）を発布しました。パリ協定やW H Oへの復帰、「国境の壁」建設の中止、イスラム圏からの入国禁止の解除などいずれも重要な政策転換に混じって、

* 9 <https://advances.sciencemag.org/content/6/40/ea6910>

「ジェンダー・アイデンティティや性的指向を基にした差別の予防と防止^{*}」が含まれていました。トランプ政権下でのバックラッシュが目に見えるものだったので、早急に対処しなければならぬとの判断でした。

下院民主党がこれに呼応して二年前に可決して以来上院でたなざらしのままだった「平等法」案を改めて採択しました。二月二十五日、共和党からも三人の賛成を得てこれを二百二十四対二百六で可決。これは既存の公民権法（黒人などの人種的少数派への差別撤廃を謳った法律）を性的マイノリティにも拡大し、ビジネスやその他施設・団体などでのSGMs差別を防止するものです。トランプ共和党が反対してきた理由は前述の、宗教上の理由でLGBTQ+コミュニティへのサーヴィスを拒否したいビジネスや組織の権利を侵害するということです。平たく言えばつまり、キリスト教（などの宗教）がLGBTQ+を認めていないのだから、認めていないものを「差別する自由（権利）」を認めよ」ということです。

この平等法は再び上院に回され、定員百のうちの六十人からの賛成を得なければ成立できません。新しい上院は民主、共和とも五十議席ずつで拮抗していますが、果たして共和党から十人が賛成に回るのか（あるいは多数派民主党が成立要件を五十一票の過半数獲得に改めるか）わからないところです。成立すれば連邦政府が管轄し予算をつけるプログラムや雇用、住宅、融資、教育、公共施設などでの差別があまねく禁止される、コミュニティ悲願の包括的な平等法となります。

もう一つ、この平等法でも議論の片付かない大きな問題が実は残っています。これはリベラルと

保守で線引きされるような簡単な問題ではありません。それは「トランス女性」と「女性スポーツ競技」の問題です。

バイデン政権は発足一カ月の二月二十四日、トランプ政権が支援していたコネチカット州での連邦訴訟から手を引きました。これは女子の高校スポーツ競技にトランスジェンダー女子の選手が参加することを禁止しようという訴訟でした。

コネチカット州は高校生選手が自分のジェンダー・アイデンティティに基づいてスポーツに参加することを認めています。ところが昨年初め、数人の女子ランナーたちが、現役のトランスジェンダー女子の短距離選手と競走しなくてはならなくなれば「自分たちが州の選手権で勝つ機会や選手としての可能性を奪われてしまう」として訴訟を起こしたのでした。トランプ政権は前述したように「性別は男か女」「生まれた時の生物学的性別しか認めない」という立場でしたので、当然、司法省と教育省はこの訴訟の原告側の女子選手たちをバックアップしていました。ところがバイデン政権になって立場は変わり、訴訟の却下を申し立てる側に回ったのです。

とは言え、この提訴をきっかけにすでに全米でハワイやテキサス、テネシー、ニューハンプシャーなどほか三十州以上が同様のトランス女子の女子競技参加禁止法案を検討に入り、ノースダコタとモンタナ州では州下院を通過、ミシシッピでは圧倒的多数の賛成で州上院を通過、そしてアイダ

* 7 <https://www.whitehouse.gov/briefing-room/presidential-actions/2021/01/20/executive-order-preventing-and-combating-discrimination-on-basis-of-gender-identity-or-sexual-orientation/>

ホでは州上下院とも賛成多数で禁止法が成立してしまいました。もっとも、それは連邦裁判所が介入して発効の一時差し止めが行われたのですが。

この問題が複雑なのは、「女性」と「トランスジェンダー」という、二つのマイノリティ・グループの権利獲得運動が衝突していることが原因です。

フェミニズムの立場としてはやっと獲得した女性のスポーツ権の保持の問題です。女性たちが平等な条件の下で勝つ権利を、今度はトランスジェンダーによって脅かされる、というのがその論理です。ちなみにモンタナ州で審議されている法案は「女性スポーツを救え (Save Women's Sports) 法」という名前です。

このトランス排除の理由づけの根底には、トランス女性はもともとは肉体的に男性であり、筋肉量も生来的に有利だという「物理的」な要素が関係してきます。そしてさらに「トランス女性は男性だ」という「思い」から派生する、ともすれば男性優位社会の中での被虐待トラウマや根深い男性嫌悪も入り込んだりするので、より複雑になります。

バイデンの大統領令はジェンダーや性的指向に基づいた差別を禁止していますし、それは「トイレやロッカールームや学校スポーツで拒否されることなく教育を受ける権利」にまで踏み込んで明文化されています。ところがお題目はあるものの教育省がそのためにどのような部分を改革してどう実現すべきかの細部は明確ではありません。

先行するNCAAの現場指針

しかし、現場はそれを待っているわけにはいきません。全米大学体育協会(NCAA)は二〇一一年時点ですでに「NCAAによるトランスジェンダー学生アスリートたちの包有(NCAA Inclusion of Transgender Student-Athletes)」という指針を発表しています*⁸。そこには前年に採択された「年齢、人種、性別、国籍、階級、信仰、教育的背景、障害、ジェンダー表現、地理的位置、収入、婚姻経歴、親の肩書き、性的指向、職業経歴等々、多様性の諸側面を横断する包摂文化の土台を維持する」という包有事務局(Office of Inclusion)の宣言とともに、三十二ページ、一万四千語を超える(日本語にすれば単純計算で四百字詰原稿用紙で百枚分ほどの)包有の実現のための細則が記載されています。

そこには「トランスジェンダーとは何か?」の定義から始まって、「なぜトランスジェンダーの問題に踏み込まなければならないのか?」「トランス学生アスリートの参加は競争の平等への懸念をもたらすか?」「トランス学生アスリートの参加の恩恵は何か?」などが事細かく議論されており、さらには実際のトランス学生アスリートたちが写真入りで自らのエピソードを披露するコラムまで掲載しながら、そもそもの「この資料の目的」を「現在の医学的および法的知識を基に、トランスジェンダーの学生アスリートたちが、いかにして大学スポーツチームにフェアで、敬意に満ち、か

* 8 https://www.ncaa.org/sites/default/files/Transgender_Handbook_2011_Final.pdf

つ合法的にアクセスできるようにするかの指針を提供することである」と明言しているのです。

いつも思うのですが、アメリカ人たちのこの、どんなことでも記録する、明文化するという文化的努力は、本当に畏れ入ります。

その上でトランス学生アスリートの参加が、既存のNCAAの内部規約の二分野に影響することが明らかになります。一つはトランス学生たちの使用するホルモンや医薬物と、使用禁止薬物の関係です。テストステロンの使用は禁止されていますが、トランス男性のアスリートには事前にその例外規定を適用する申請書の提出が必要となります。同様にトランス女性の場合はテストステロン抑圧剤の使用に関して一年間の治療記録やモニタリング記録の提出が求められます。もう一つは男女混合チームの構成員の定義ですが、これもトランス女子／男子の参加に前述の申請書の提出が求められるのです。

このNCAAガイドラインは日本の学生スポーツ界でも参考にすべきものでしょう。

ちなみにNCAAはトランスジェンダー学生をスポーツ競技参加から排除する州では大会を開催しないことにしています。二〇一六年、ノースカロライナ州がトランスジェンダーのトイレ使用に関して出生時の生物学上の性別以外のトイレを使わせないという法律を通過させた際、NCAAは同州で行われる七つの選手権大会をすべてキャンセルしました。この中には同州で特に人気のNCAA男子バスケットボール・トーナメントの試合も含まれていました。それだけではなく、アメリカの四大プロスポーツの一つであるNBA（全米バスケットボール協会）も翌二〇一七年のオールスタ

―試合を同州から移してしまった。反トランス法を成立させてしまった前述のアイダホ州でも現在、同じような動きが見られるのです。

これは実は単に政治的な問題ではなく、経済的な問題にもつながります。例えばNBAのオールスター試合はざっと五十億円ほどの経済効果をもたらします。試合のキャンセルはすべてのスポーツ分野に及びつつあるばかりか、差別反対の世論に押されて企業や興行・ビジネスのポイコットも相次ぎます。それらはやがてオリンピックの開催機会の喪失にもつながります。五輪憲章があらゆる差別を禁止しているからです。森喜朗発言で女性排除・蔑視の現状が暴露された日本も他人事ではありません。

妄想としての「脅威」、自明としての「差異」

そしてもう一つ、見逃してはいけないことがあります。全米で起きている反トランスジェンダー訴訟の大半は、実は「実害」を基に提訴されたものというよりは、かつて石原慎太郎に「尖閣購入」を演説させたアメリカの保守シンクタンク「ヘリテージ財団」や前述のコロラド州のケーキ店訴訟の後ろ盾だったキリスト教右派組織「自由防衛同盟 (Alliance Defending Freedom)」の政治キャンペーンであるという点です。つまり問題は、彼らにとっては「女性の権利を守るという大義名分」ではなく、「トランスジェンダーの脅威」という妄想を煽り、「リベラルの台頭を阻止する」というのが第一の、かつ唯一の、狙いだということなのです。

スポーツが一義的には物理的な肉体の、体力の問題であることは明らかです。そもそもそこから男女の競技が分かれています。「性別」にとどまらず、その考え方を進めることで柔道やレスリングなどではオリンピックでも体重別になりました。肉体的競技としては「柔よく剛を制す」はずでに虚構になりました。

しかしそれならば相撲はなぜ体重で分けないのか？ 陸上で脚が長い選手と短い選手で分けないのは不平等ではないか？ 年齢の差異はどうか？ 親の年収差、出身国の環境差はどうするのか？——そんな究極の分類分けの問題にまで進みます。それは最も現実的には、人種的な肉体の優劣の議論、人種別競技の愚にまで及ぶかもしれません。ちょうどベルリン五輪でアリア人種の優秀さを見せつけようとしたヒトラーが、陸上の米国黒人選手ジェシー・オウエンス (Jesse Owens) に四冠を達成されたのを見た時に感じた屈辱感を肥大させるように。

ここまでの議論でわかることはただ、私たち人間はとても多様なものなのだ、という自明のことだけです。いろんな人がいる。どこでどんな区分けをするのか、それは時代によって変わるでしょう。そして同時に、スポーツでの優劣は遺伝子的な差異や優劣だけで決まるものでもないという自明もまた。

ならば心がけることは、差異を基に安易に排除の方向に流れるのではなく、差異を前提としてい

かにみんな楽しんでむかを考える、その努力を続けるしかないということだと思っています。